

日本人高齢者における Subjective well-being と社会関係資本の関連に関するメタ分析

福沢愛・中川威・竹内 真純・

Sala Giovanni



メタ分析を用いて、日本人高齢者の Subjective Well-being (以下 SWB) と社会関係資本(社会的ネットワークなど)の関連に関する知見を統合することを目的とした。欧米のメタ分析において SWB の関連要因は、社会経済的要因(収入・経済的豊かさ・学歴)、健康状態、社会関係資本の 3 つに大別できることが指摘されてきたが、その知見が日本でも当てはまるかは明らかになっていなかった。本研究ではメタ分析を行い、日本人高齢者における知見の統合を目的とした。

これまで、1 次スクリーニング、2 次スクリーニングで適格性評価を行ってきた。適格性評価では、事前に決めた基準に則り、データベースの検索でヒットした論文を分析に加えるか否かを評価する。本プロジェクトでは、幸福感が測定されていること、相関係数などの統計量が報告されていること、平均 55 歳以上の日本人対象の査読付き論文であることなどを基準とし、1 本の論文につきアルバイトを含む 2 名のコーダーで判断した。

1 次スクリーニングでは、データベースで文献を収集し、重複を削除した 2866 論文の抄録を確認することで適格性評価を行い、1468 本が採択された。2 次スクリーニング

では、採択された 1468 論文の本文から適格性評価を行い、221 本の論文を選出した。このうち、コーダー間で評定の一致しない 109 本については、現在協議中である。

令和 6 年度には 2 次スクリーニングを行うのと同時に、選出された論文の内容についてもレビューを行った。日本人高齢者においては、SWB だけではなくモラール(心理的動揺、老いに対する態度、孤独感、不満足感)など、高齢者特有の well-being 指標が多く測定されていること、社会経済的要因よりも、健康状態や社会関係資本と well-being との関連に関する知見が多いことが明らかになった。

レビューの結果、日本人高齢者の「しあわせ」研究では、今現在の肯定的感情や happiness など短期的な well-being だけではなく、モラールのような高齢者特有の well-being が重視されていることが明らかになった。モラールは SWB より前に提唱された well-being 指標であるが、これまで欧米の研究ではあまり扱われてこなかった。これまでも、「しあわせ」の意味が日本と欧米では異なるなどの文化差が指摘されてきた。身体的健康状態が悪化しやすい高齢期には、短期的な well-being だけではなく、心理的安定や老いた自分の受容が日本人高齢者にとっての「しあわせ」につながる可能性が示された。これらのことから、今後のしあわせ研究には、文化的視点や世代差の視点が欠かせないことが明らかになった。